



2006年10月

第4号

## 学術に裏打ちされた地域学の確立と 主体的な社会貢献に期待する

飯田市長 牧野光朗



「三遠南信」という纏まりは、具体的には中部経済連合会が発表した「三遠南信トライアングル構想」に端を発すると認識しています。そして、行政ではなく、経済界からそのような広域圏が提唱されたという点に大きな意義と可能性を感じます。

この東三河、遠州、南信州という3地域は、天竜川の通船や三州街道や遠州街道、或いは秋葉街道などにより、生活、文化、経済、信仰などという人々の日常生活のあらゆる分野において、早くから活発な交流が行われてきました。このことは、戦国時代以来の大名同士の力関係や明治維新による政治的な意図に基づく地域分割を経ても、なお継続してきました。

この結果、愛知、静岡、長野の3県の県境地域は、行政の境界を越えて独自の生活文化圏を構築してきたとも言えます。このような経緯を踏まえ、この県境地域では昭和40年代から県を超えた市町村による交流会が続けられ、過疎化などの共通する課題解決に向けた試みが始まっています。これらの歴史を踏まえて発表されたトライアングル構想は、今日の三遠南信連携の礎となっています。

こうしてみると三遠南信の交流は、まず民間の活動があり、それを行政がフォローし、そして今日改めて学際的な探求、或いは実践の場になっている、という段階を踏んできているように思います。

このように、産・学・官・民が、時には単独で、時には連携しながら、それぞれの役割を果たそうとしていることに三遠南信が他の県境を挟んだ広域交流と大きく異なる特徴と意義があるものと考えています。

今日、この交流を社会基盤として支える三遠南信道路の建設が大きく進み、この広域交流圏が益々身近に感じられるようになって参りました。

それにより、この広域交流圏域を、将来に向けてどの様にしていくのかという大きな課題へ取り組む必要性が高くなってきたとも言えます。

このように、未来に対する可能性や課題を予め予測し、取り組みを展開していくという点において、「学」が果たすべき役割は増大していると思います。

この点におきまして、愛知大学には、設立当初から総合郷土研究所と中部地方産業研究所が中心となって地域社会、地域文化及び地域経済に関する教育、研究が蓄積されてきた実績があり、更に三遠南信地域連携センターを設立されて活動を強化されてありますことは、私たちの地域にとりましても大変意義のあることと考えてあります。このため、地域の発展に欠くことができない大学として内外からの評価も高く、当地域においてその地位を確固たるものとされていると確信するところです。

今、時代は大きく動こうとしています。平成の大合併によって基礎的自治体である市町村も大きく様変わりしようとしてあります。また、道州制の具体的なビジョンと日程を想定しながら議論されるようになってきました。

これらの状況を踏まえ、既に10年以上の歴史を有する三遠南信サミットなどの取り組みも、更にグレードアップしていく必要があるのでないでしょうか。

そんな問題意識の基に、「三遠南信連携ビジョン」の策定に取り掛かろうとしてありますが、この計画の立案と実施に際し、「学」に対する期待は大きいものがあります。

これらを踏まえ、愛知大学三遠南信地域連携センターのめざします「学術に裏打ちされた地域学の確立」とそれに基づくより主体的な社会貢献は、三遠南信地域の今後に大きく結実していくものと期待しております。

### CONTENTS

- 1 学術に裏打ちされた地域学の確立と  
主体的な社会貢献に期待する
- 2 センター事業の取り組み状況
  - ・地域づくりアドバイザー制度  
立ち上げ
  - ・日中で中学生の社会力・職業意識  
に関するシンポジウム開催
- 3 2005年度センター事業に対する評価
- 4 センター・トピックス
  - ・日韓共同研究の成果概要がまとまる
  - ・とよがわ流域大学修了生から共同事業が提案
  - ・三遠南信サミット住民セッション準備すすむ
  - ・とよがわ流域講座を開講
  - ・壳木村のふるさとづくり促進事業を受託
- 5 『書評』『小さな自治を育てる』
- 6 活動記録
- 8 地域づくりサポーター活動状況

## センター事業の取り組み状況

### 教育・人材育成事業

#### 地域づくりアドバイザー制度立ち上げ

センターではこれまで地域づくりを支援する、あるいは地域づくりを協働ですすめる事業を行ってきたが、そうしたなかで自治体から地域づくりを支援するためのアドバイザー派遣の要請があった。この要請に応え、学術的研究と地域実践をあわせた事業を推進して社会・地域貢献を行うことを目的に、「地域づくりアドバイザー制度」を設けることになった。これを通じて『地域のなかに大学をあく、大学のなかに地域をあく』ことを実現し、地域

事業責任者 岸本 恵次郎

と大学との連携をいっそう進展させることを目指すことにしている。

地域づくりアドバイザーは、さしあたり豊橋校舎の専任教員と研究所・センターの研究員の方から募集することにし、およびかけたところ現時点で18名の方に登録していただいている。アドバイザーは、地域の要請があった場合に課題に応じて派遣されることになる。また、登録していただいたアドバイザーには「アドバイザー基本情報」を提出していただき、センターのホームページあるいは冊子で公開することにしている。

### 官学連携事業

#### 日中で公開シンポジウム開かれる

三遠南信地域は、山村、農村、都市と様々な地域特性を持っている。昨年度三遠南信地域の中学校128校、約10,000名の協力を得て「これから先の自分自身の力を育て、社会と関わっていくための力（社会力）」と「将来就きたい職業意識に対する意識」の形成について調査を実施した。併せて、同様の調査を中華人民共和国において、3市8省の中学生11,000名の協力を得て実施することができた。この二つの調査結果を踏まえて、三遠南信地域と中国北京市において、公開シンポジウムを開催した。

#### 中学生の社会力・職業意識に関するシンポジウム（日本・豊橋市）



9月9日、愛知大学豊橋校舎において「三遠南信地域の中学生の社会力・職業意識を考える」をテーマに開催された。黒柳孝夫副学長の開会挨拶に続き、調査報告を平川雄一センター研究員が、武田圭太愛知大学文学部助教授が、「青年前期のキャリア展望」と題して基調報告を行った。後半では、佐藤元彦センター長をコーディネーターとして、武田圭太愛知大学文学部助教授、岩崎正弥愛知大学経済学部助教授、竹前雅夫飯田市教育委員会生涯学習課係長、小早川久幸豊橋市教育委員会総務課長、小原侃之輔

事業責任者 泰嶋 久好

前静岡県佐久間町長の各氏によるパネルディスカッションを行った。なお、三遠南信地域の中学生の社会力・職業意識に関する調査に関しては、報告書として発刊されている。

#### 中学生の社会力・職業意識に関する国際シンポジウム（中国・北京市）



9月16日、中国・北京市の北京郵電会議中心において、愛知大学、中国科学院等の共催による国際シンポジウム「転換期における若者の志向と将来を考える－中・日中学生の社会力・職業意識の比較－」が開催された。中国側からは、中国社会科学院、中国人民大学、清华大学等の研究者12名による研究報告がなされた。愛知大学からは、基調講演を佐藤元彦センター長、泰嶋久好センター上席研究員が行い、続いて、鈴木尚通松本大学教授、福井幹彦愛知大学名誉教授、平川雄一センター研究員、武田圭太愛知大学文学部助教授の各氏が、日本と中国の中学生意識調査結果に基づく研究発表を行い、社会力の形成、将来の職業観の意識の差異が注目された。シンポジウムの概要是、報告書として取りまとめられる予定である。

## 2005年度三遠南信地域連携センター事業に対する評価

センターでは、2006年度前半に、学外のセンター会議委員による2005年度事業評価を実施した。その結果8名の委員より評価が寄せられたが、以下はその結果をとりまとめたものである。

### ◎地域づくりデータベース構築事業

評価できる点	改善が必要と思われる点・要望点
<ul style="list-style-type: none"> <li>自治体には地域づくりのノウハウ、データのストックがないので有益で評価できる。</li> <li>公的に公開される「地域づくりに関わるデータベース」の重要性は、データ処理に不慣れなNPOや市民団体、その他関係者にとって、その役割は大きい。</li> <li>三遠南信地域をエリアとする初めての本格的なデータベースが構築される点を評価したい。</li> <li>この事業自体が先進的な取り組みであり、今年度予定した2つの研究活動については計画通り実施され、ESRI社のGIS教育支援プログラムに採択されるなど、次年度へつなげることが出来た点を評価する。</li> <li>時代にあった先進的な事業であり、その必要性から見て高く評価できる。</li> <li>2005年度ではシステム研究や選定が計画通り進み、その後はシステムが稼動し、地域づくりニュース等外部に向けての具体的な事業へ確実に進んでいる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>直接、改善というわけではないが、地域づくりの課題は個別具体的である。活用に足りうる項目・地域づくりの道具になるシステムをどう構築するかが鍵。作ったが活用されないデータベースになつては意味がない。</li> <li>データベースの主旨目的の絞込みが今後の課題である。</li> <li>要望として、地域資源（人、モノ、場所、ノウハウなど）が時系列（過去・現在・未来）に蓄積されていくといい。何か地域に問題が発生したとき、その解決方法がアーカイブ/バンク的なものによって明らかになるシステムが望ましい。民俗芸能祭り、文化、自然など今後変化していくもの、歴史を遡って各市町村にあるビデオのデジタル化、市民からの提供、自主的な撮影など、可能な限りデジタル化動画・音声をデータベースとしていって欲しい。</li> <li>データベースの更新など長期的にわたるシステムの運営管理体制がよく見えない（作りっ放しになつてしまふ恐れがある）。</li> <li>コンテンツが誰にでも使用できるよう、パンフレット等による分かり易いPRが必要と思われる。</li> <li>コンテンツの充実が期待される。</li> <li>完成後、広く利用される事を望むとともにどのような場面で活用されるのか、関心を持つ。</li> </ul>

### ◎学術的共同研究事業

評価できる点	改善が必要と思われる点・要望点
<ul style="list-style-type: none"> <li>基礎的研究としていつかやっておかなければならぬので意義は大きい。</li> <li>流域、水系社会を総合的に俯瞰する視点、その国際的比較・協働研究など、地域を見る新たな「総合性」のある観点を評価したい。</li> <li>一般市民の参加、現地視察やフィールドワークを取り入れた事業、日韓共同ワークショップなど、大学の特長が活かせた事業内容を評価したい。</li> <li>副次的業務とはいえ、連続講演がブックレットという形で発刊される事が評価できる。</li> <li>流域社会を考える基礎的な研究が計画通り進められている。</li> <li>流域社会の近代化過程に関する総合的研究では、これまでの歴史に重きを置き、地域文化・民俗の住民意思を研究したことを評価したい。また、地域づくりのアジア連携では中国・韓国との比較検証は意識や意欲、対応の差を理解しやすく資料として有用と思う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>流域社会の実態は、文化・風俗に残る。しかし全国各地で見られるように交通手段、とりわけ車社会の実現により「流域圏」という実態は姿を消したのではないか。かつてあった水運の地域に及ぼした影響などその変遷を中身に入れておくべきである。</li> <li>研究の対象が「三遠南信地域」=流域社会=上流部=「山村過疎」という観点から定められているように見えるが、三遠南信地域下流部（世界でも有数の工業集積）についてどのように取り込むかを考えて欲しい。</li> <li>一般市民の参加が難しく、三県の垣根がなかなか取り払いれない。既に三遠南信交流のあるNPOや任意グループに声をかけて参加を促すと共に、食、文化など、難しくないテーマで研究を進めて欲しい。</li> </ul>

### ◎官学連携事業

評価できる点	改善が必要と思われる点・要望点
<ul style="list-style-type: none"> <li>フィールド調査が入っている点は評価できる。</li> <li>「中学生」に焦点を当てたところが興味をそそる。</li> <li>中国・韓国での同一アンケートにより、調査報告が興味深い。</li> <li>数多くの連携業務に積極的かつ精力的に取り組んでいる。</li> <li>三遠南信サミットの会場で行ったセンターの事業報告はセンターの活動内容を経済界や行政などに広く情報提供する場となり、今後の連携などにもつながる有意義なものであった。</li> <li>時代を担う子供達、とりわけ中学生に視点をあいた研究は効果的に思う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域力点検システムはあれば便利だと思われる。しかし、全国の中山間地や過疎地域では、地域社会崩壊過程の中にあるのではないだろうか。先行の成功事例の分析も必要ではあるが、何が欠けると地域社会は崩壊に向かうのかという視点も忘れないで欲しい。</li> <li>「官」の活用から「官」の啓発へ展開していくことを期待したい。</li> <li>「地域経営、地域づくり評価システム」がどのようなアウトプットになるのか最終形がイメージしにくい。</li> <li>地域経営、地域づくりの評価では日々を営む地域住民に対し、いかに解りやすく具体性のある提案をし、受け入れやすくするかに留意する必要がある。</li> </ul>

## ◎教育・人材育成事業

評価できる点	改善が必要と思われる点・要望点
<ul style="list-style-type: none"> <li>・インターンシップ、センターはともに、学生当事者にとって、きちんと貴重な体験機会を提供しているものと評価できる。</li> <li>・流域大学は「地域づくり、人材育成」を目的としており、その「心」は地域運動の当事者づくり。とすれば、この流域大学は、貴重な機会を提供しているものと考えられる。</li> <li>・フィールドワーク重視の取り組みを評価したい。</li> <li>・「とよがわ流域大学」は単年度の県委託事業であるが、地域を支える人材育成の取り組みとして高く評価したい。</li> <li>・“とよがわ流域大学”の開催は、地域づくりのリーダー養成を目指した初の試みとして工夫を凝らした講座の開催により、受講生のネットワークが形成される動きが見られる等、次年度以降に繋がる成果であった。</li> <li>・「地域づくりセンター制度」は、地域と大学を結ぶ学外教育の場として大変ユニークな取組であり、初年度の活動として順調であった。</li> <li>・現代社会で急務な事業は教育であり、人材育成をセンター事業として取り上げた事がまず評価できる。日常的、習慣的な生活に変化を与える幅広い体験を促すインターンシップ、地域づくりセンター制度はよいと考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まだ、試行錯誤の段階だと思われるが、どんどんチャレンジして突破口を開いて欲しい。</li> <li>・“学生力”の投入は有益であるが、年齢が限られている。活動に継続性を持たせる仕組みを上手く仕込んで欲しい。</li> <li>・地域社会における組織論、NPO等の運動組織の「地域での認知拡大の手法」などの習得が「人材育成」の要となろう。</li> <li>・事業で発見したものの中から三遠南信地域全体で実行できそうなものを選び、(地域通販など)実行するための調査を深めていってもよいと思う。</li> <li>・「とよがわ流域大学」のような取り組みを地域として実施できるよう検討を期待したい。</li> <li>・インターンシップについて、受け入れ側では大学の単位取得に結びつく学生を優先しているところもあり、充実していくための1つの方法として考えられるのではないか。</li> <li>・メールで逐次研究会や調査会についての案内を出す等により学外委員の参加を促す(ホームページを開くことはめったにないので、このような事業の案内は一斉メールのほうが有効)ことを期待する。</li> <li>・「とよがわ流域大学」は好評だったので、何らかの形で2006年度も実施することが望まれる。</li> </ul>

## ◎その他全般

評価できる点	改善が必要と思われる点・要望点
<ul style="list-style-type: none"> <li>・全体として、大変活発な「動き」を感じられるようになって来た。</li> <li>・積極的に事業が進められており、全体的に評価できると思う。</li> <li>・数多くの連携業務に積極的かつ精力的に取り組んでいる。</li> <li>・短期間で多くの事業が実施されたことを高く評価したい。地元の人々を中心に、いざれも流域社会の潜在力、可能性に焦点を当てたものであり、地域づくりに貢献できるものである。</li> <li>・受託事業を受け入れ、活動した事が「駄菓子屋愛大の店」に取り組む意識改革になった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークショップは一つひとつ功績になるので積み重ねて欲しい。</li> <li>・フィールドワークを実施しているので、無用の心配かもしれないが現場の声にいつも耳を傾けて欲しい。研究は立派だったが、地域の問題解決にはならなかったのではない。一つの実行成功例を見せるだけでもインパクトは強い。余計な言及かもしれないが、常に現場、現地に即して活動や展開される事を期待する。</li> <li>・大学が提供する各種サービスの対価についても、今後の検討課題であろう。「市民サービスを目的とする資金導入」に基づく「無償サービス」は、長続きしないのではないか?</li> <li>・今後は一般市民、NPO、学生等若年者など3県からの参加を期待したい。</li> <li>・国際セミナー・ワークショップ等への参加については、早い段階で情報提供していただきたい。内容によっては、外部委員の参加も検討、また、外部委員のコメント・質問等も国際セミナーなどに持参できるといい。</li> <li>・新たな事業に参加するという積極的、前向きな人材を育成するため、いっそう受託事業を取り入れる必要がある。</li> </ul>

## センター・トピックス

### ●日韓共同研究の成果概要がまとまる

センターが韓国の産業研究院(KIET)国家均衡発展研究センターとの間で昨春以来進めてきた「持続可能な過疎地域発展構造の日韓比較研究」の成果の概要が、3月末にソウルで開かれた研究会で固まり、現在出版に向けた作業が進められている。三遠南信地域連携センター側からは、佐藤センター長と黍嶋上席研究員、それに平川研究員が、また、韓国側からは、許文九、李鎮勉の両KIET研究員と韓国政府国家均衡発展委員会の宋宇慶委員の3名が執筆を分担し、過疎地域の現状と推移に関する計量的分析、過疎地域政策の展開と動向、過疎地域選定における指標の開発、過疎地域の財政と財政支援制度の4つの章が中核と

なる。

日本側が担当する内容は、過疎地域の推移を分析し、過疎から非過疎へ、あるいは逆に非過疎から過疎へと変化した事例を集めるとともに、いくつかの注目される事例をピックアップして、そうした変化の背景を人口動態と財政の観点から明らかにするものとなっている。その際に、過疎から非過疎となった代表的な地域については、どのような政策が有効であったのかについて詳しく分析されている。韓国側については、こうした日本の経験を基に、韓国の過疎対策として適用できるものを抽出すると共に、今後の具体的な政策提言をとりまとめる内容となっている。

翻訳作業の関係で、出版は来年初めにずれ込む予定であるが、まずは韓国語で出版され、その後に日本語で刊行されることになっている。また、来年2月に成果を基にした国際シンポジウムの開催がソウルで予定されており、その際には、共同研究関係者のみならず中国をはじめとする他のアジア諸国からの専門家の参加も検討されている。

### ●とよがわ流域大学修了生から共同事業が提案

センターでは「とよがわ流域大学は修了式をもって終わるのではなく、これをスタートに位置づける」との確認をうけて検討した結果、修了生に対して「地域づくり共同提案事業」を募ることとし、修了生に呼びかけたところA班、D班の2グループから提案が出され、センターとしてこれらを支援することとした。

A班の提案事業は、田原市野田地区を対象に「人と人がふれ合うまちづくりプラン」の作成をめざすもので、本年度はその第1段階として野田地区の地域資源の調査計画を実施する。代表者は山田政俊さんでグループ7名により事業をすすめる。

もうひとつのD班は、箕和美さんを代表とする7名のグループで、「清流日本一の豊川流域づくり立案調査」を行う。本年度は上流域を対象に流域住民へのアンケート調査および聞き取り調査を実施し、特色ある流域づくり活動をすすめていこうというものの。

両班に対しては補助金として各5万円を支給し、年度内に報告書を提出していただくことになっている。実り多い成果を期待したい。

### ●三遠南信サミット住民セッション準備すすむ

東三河・遠州・南信州の自治体、経済界が一堂に会し、三遠南信サミットが開催されてきたが、2005年度より住民セッションが実施されている。この度、2006年度の住民セッションを準備するにあたり、豊橋市からセンターに事務局を担当するよう依頼があった。7月14日に住民セッションの内容を検討する市民団体連携委員会（委員長は穂の国森づくりの会の原田さん）が設置され、準備がスタートした。

三遠南信サミットは10月23日（月）に開催されるが、住民セッションは、午前中に愛知大学を会場として2つの分科会をプレゼンション

として開催、お昼に昼食交流会、午後にはホテル日航に会場を移して全体会と本セッションを予定している。分科会は、「三遠南信の歴史・文化資源を発掘する」と「あらあこし・まちづくり・結び合う地域」の2つ。住民セッションでは、各地域の住民や団体による議論や交流を通じてネットワークづくり、情報発信の可能性を探り、自立的で活力ある圏域づくりの実現がめざされる。

### ●とよがわ流域圏講座を開講

センターは、東三河地域研究センターおよび国土交通省豊橋河川事務所と連携して「とよがわ流域圏講座」を10月21日からスタートさせる。9月25日には、そのための記者発表会を開き、6回の講義と1回のエクスカーションからなる講座の概要が公表された。今回の講座は、「森・川・海でつながる私たち」との講座のサブタイトルにも示唆されるように、まずは、とよがわ流域圏に関する正しい基礎知識を身につけること、そして、それを流域づくりに活かすために積極的に市民的活動に反映させることができることを重視して開講している。講義はほぼ2週間に1回のペースで実施され、第5回にはパネルディスカッション、第6回には受講生による成果発表も予定されている。また、講師陣は、文字通りに産官学民が総力をあげた形になっている。なお、センターでは、今後はこうした講座を「三遠南信コミュニティカレッジ」という枠組みの中で運用していくことを検討している。

### ●売木村のふるさとづくり促進事業を受託

長野県売木村では、このたび平成18年度ふるさとづくり促進事業として「定年さん、おいでなんよ！」事業を実施することになったが、その中の『ターン者受け入れマニュアル』作成、パンフレット作成等の業務をセンターが受託することになった。具体的には、体験モニターや村民への聞き取り調査をセンターの地域づくりサポート者が行い、その結果をこれらの印刷物の内容に反映させるというもの。10月10日には、売木村から本事業関係者がセンターを訪れ、学生への大きな期待が述べられた。

## 《書評》

### ●岩崎正弥・泰嶋久好（著）『小さな自治を育てる』（三遠南信地域連携ブックレットNo.1）

評者：長野県泰阜村長 松島貞治

一方で、泰嶋氏が、過疎の山村で直面した市町村合併という大問題から、市町村行政の区割りによって、そこに生きる住民がどのような影響を受けるのであろうか、大合併の行く末に注目している。新浜松市の合併で、長野県の隣、旧水窪町が政令指定都市となる。こんなこ

とが現実に起こるとは、10年前想像すらできなかった。この新浜松市の合併をうらやましい、といつた近隣の山村村長がいた。いまの山村の置かれた厳しい環境では、その声も理解できる。しかし、それで住民は、幸せなのだろうか、と思

う。現場を熟知した泰嶋氏の心の奥に、平成の大合併推進は住民を無視している、という思いがあるのでは、と推測するのだが、言い過ぎであろうか。

いずれにしても現場をよく観察し、そこから見えてくるものでなければ読者は感動しない。両氏が、ともに現場感覚を持ち合わせ、住民に視点を注いでいることがすばらしい。次のブックレットが楽しみである。

福祉の現場で研修をしようとする学生や自立をめざす小さな山村をみようと行政関係者が泰阜村を訪れる。そんな皆さんにいつも話すのが、福祉や山村の行政現場には専門家はいらない、ということである。つまり、専門的な知識より、福祉では、人を思いやる温かい心が大切であり、行政現場では、村を愛する情熱の方が大事である、ということを言ってきた。この感覚は、過疎の山村で生きている人間として、間違っていないと今でも思うのだが、このブックレットを読みながら、専門家軽視の考え方でいいのだろうか、と

問い合わせている。それは、自分自身が、学歴もなく、地方自治の勉強などしていないことを肯定しようとしているだけではないのか、という自省の念とともに、地域で起きているよき事例を体系的に捉え、それを普遍化させることは、専門家でなければできないのではないか、という思いもある。岩崎氏の住民とは誰か、非住民をつくらないという考え方では、実は、わが村の福祉行政の原点であるのだが、このような形で説明されたことはなかった。やはり、専門家としての視点であろうし、県、市町村といった区割りより、地域力が大切であることを教えられる。



写真

（左）

（右）

（中）

（下）

</div

## 活動記録 (2006.6 ~ 2006.9)

月	日	研究会・委員会等名	出席者・概要	会場
6 月	3日(土)	第1回地域づくり・地域経営評価システム開発研究会	〈プロジェクト委員〉 池田豊人(国土交通省) 高井克明(国際連合地域開発センター) 諸橋和行(日本システム開発研究所) 稻垣英樹(安城市役所) 佐藤センター長、黍鷗、平川、暁	研究館第3会議室
	9日(金)	運営委員会(06-6)		センター事務室
	13日(火)	第1回地域づくりガイドライン検討委員会	〈プロジェクト委員〉 吉井弘和(農山漁村文化協会東海近畿支部) 三宅淳子(NPO法人三遠南信アミ) 佐藤センター長、岩崎、黍鷗	センター事務室
	15日(木)	学術的共同研究事業公開講演会 テーマ:「里」という思想をめぐって	講師:内山節(立教大学大学院教授)	研究館第1,2会議室
	16日(金)	三遠南信サミットin東三河2006住民セッション準備会議	黍鷗、岸本、平川	研究館第1,2会議室
	22日(木)	第1回東三河データブック調査・分析研究会	〈プロジェクト委員〉 新井野洋一、西村正広、印南敏秀、市野和夫 佐藤センター長、黍鷗、平川、暁	研究館第4会議室
	23日(金)	運営委員会(06-7)		センター事務室
	28日(火)	地域交流連携連絡会	佐藤センター長、黍鷗	車道校舎会議室
7 月	4日(火)	第1回GISデータベース構築研究委員会	〈プロジェクト委員〉 西尾美徳(カナエジオマチックス) 佐藤センター長、蔵、湯川、龍、黍鷗、平川	豊橋情報メディアセンター
	7日(金)	運営委員会(06-8)		センター事務室
	10日(月)	県境を跨ぐエコ地域づくり戦略プラン研究会総会準備会	岩崎、黍鷗、山本(晃)	豊橋商工会議所
	11日(火)	第2回地域づくりガイドライン検討委員会	〈プロジェクト委員〉 吉井弘和(農山漁村文化協会東海近畿支部) 原田敏之(NPO法人穂の国森づくりの会) 三宅淳子(NPO法人三遠南信アミ) 佐藤センター長、岩崎、黍鷗、平川、大石(センター)	車道校舎ゼミ室
	14日(金)	三遠南信サミットin東三河2006住民セッション準備会議	黍鷗、岸本、平川	研究館第1,2,3会議室
	21日(金)	運営委員会(06-9)		センター事務室
	24日(月)	県境を跨ぐエコ地域づくり戦略プラン研究会総会	《基調報告》佐藤センター長 「地域づくりの国際政治経済学—三遠南信地域とアジアを結ぶ研究に向けて—」	豊橋グランドホテル
	27日(木)	第2回東三河データブック調査・分析研究会	〈プロジェクト委員〉 西村、印南、市野、和田明美 佐藤センター長、黍鷗、平川、暁	研究館第3会議室
8 月	28日(金)	第2回地域づくり・地域経営評価システム開発研究会	〈プロジェクト委員〉 池田豊人(国土交通省) 諸橋和行(日本システム開発研究所) 稻垣英樹(安城市役所) 小原侃之輔(前静岡県佐久間町長) 佐藤センター長、黍鷗、蔵、岸本、暁	愛知大学東京事務所
	4日(金)	三遠南信サミットin東三河2006住民セッション準備会議	黍鷗、岸本、平川	研究館第1,2,3会議室
	7日(月)	第3回地域づくりガイドライン検討委員会	〈プロジェクト委員〉 吉井弘和(農山漁村文化協会東海近畿支部) 原田敏之(NPO法人穂の国森づくりの会) 三宅淳子(NPO法人三遠南信アミ) 佐藤センター長、岩崎、黍鷗、平川、大石(センター)	浜松まちづくりセンター
	7日(月)	第2回GISデータベース構築研究委員会	〈プロジェクト委員〉 西尾美徳(カナエジオマチックス) 佐藤センター長、蔵、有園、宮沢、湯川、龍、黍鷗、平川	豊橋情報メディアセンター
9 月	28日(月)	国土形成計画シンポジウム	主催:地域交流連携連絡会 《パネル報告》:佐藤センター長 「国土形成計画への提案—地域協働計画について—」	車道校舎コンベンションホール
	1日(金)	第3回地域づくり・地域経営評価システム開発研究会	〈プロジェクト委員〉 池田豊人(国土交通省) 高井克明(国際連合地域開発センター) 諸橋和行(日本システム開発研究所) 稻垣英樹(安城市役所) 小原侃之輔(前静岡県佐久間町長) 佐藤センター長、黍鷗、岸本、暁、片野(センター)、三宅(センター)	車道校舎ゼミ室

月	日	研究会・委員会等名	出席者・概要	会場
9 月	2日(土) ・3日(日)	三河コンヴェクションアカデミー(CA)・「第1回ワーキングエンドセミナー」	地域住民の参加を得た豊橋技科大との合同ワークショップ 岩崎、黍嶋(近藤、保木、加藤、天野、小川、片野、大石)	三河 CA(旧七郷一色小学校)
	3日(日)	三遠南信発見・交流フォーラム	主催:NPO法人三遠南信アミ(センターが協力) 佐藤センター長がスピーチ	愛知県民の森
	4日(月)	東三河流域フォーラム幹事会	佐藤センター長がセンターの概要について報告	豊橋商工会議所
	8日(金)	運営委員会(06-10)		センター事務室
	9日(土)	公開シンポジウム「三遠南信地域の中学生の社会力・職業意識を考える」	開会挨拶:黒柳孝夫副学長 調査報告:平川雄一「三遠南信地域の中学生の社会力・職業意識アンケート調査結果の概要」 基調報告:武田圭太「青年前期のキャリア展望—三遠南信地域に住む中学生の社会力と職業意識—」 パネルディスカッション: △ 岩崎正弥(経済学部助教授) △ 竹前雅夫(飯田市教育委員会生涯学習課知育力向上係長) △ 小早川久幸(豊橋市教育委員会総務課長) △ 小原侃之輔(前静岡県立佐久間町長・NPO法人がんばらいが佐久間顧問) コーディネーター:佐藤元彦 総合司会:黍嶋久好	研究館第1,2会議室
	12日(火)	三遠南信サミットin東三河2006 住民セッション準備会議(第1分科会)	平川	本館第4会議室
	16日(土)	国際シンポジウム 「転換期における若者の志向と地域の将来を考える —中・日 中学生の社会力・職業意識の比較を中心に—」	共 催:中国人民大学人口社会学院、北京市中日文化交流史研究会 開会挨拶:陳応年(北京市中日文化交流史研究会副会長) 第1部: 基調講演1 佐藤元彦(三遠南信地域連携センター長) 「アジアにおける地域づくりと人づくり」 基調講演2 李路路(中国人民大学人口社会学院院長) 「中国における中学生の職業意識の形成と構造」 基調講演3 黍嶋久好(三遠南信地域連携センター 上席研究員) 「日本の過疎地域における教育と中学生の意識」 基調講演4 木 崇道(中国社会科学院哲学研究所 教授) 「中日中学生の社会力と職業意識の調査結果をめぐって」 第2部: 発表1 平川雄一(三遠南信地域連携センター 研究員) 「日本(三遠南信地域)と中国(沿海・中部内陸部)における 中学生の社会力・職業意識調査結果の概要」 発表2 武田圭太(愛知大学文学部 助教授) 「青年前期のキャリアに関する自己評価の中日比較」 発表3 鈴木尚通(松本大学経営総合学部 教授) 「中国・日本中学生「社会力」・「職業意識」などに関する調査 の分析—中国・中学生「社会力」を中心として—」 発表4 申淑子(中国人民大学外国语学院 助教授) 「起業家精神の育成をめぐる国際比較分析」 発表5 鄭連友(北京外国语大学日本文化研究中心 助教授) 「中日中学生を取り巻く環境の相違に見られる両国中学生の考え方の 違い—中日中学生社会力と職業意識アンケートを手がかりに—」 発表6 木 桂樹(北京工業大学外国语学院 講師) 「中国の職業教育について —中日両国中学生の進路選択で思うこと—」 発表7 李海春(北京化工大学 講師) 「中日中学生の社会感知及び社会化資源分析」 発表8 孫彬(清华大学外国语学院 講師) 「中日青年の職業意識の差異—文化と教育の面から見て—」 発表9 劉文柱(中国中医科学院 教授) 「二人の中学生の職業意識における同と異」 発表10 李萍(中国人民大学哲学院 教授) 「中日中学生の社会参与度についての比較」 第3部 コメント1(日本)福井幹彦(愛知大学 名誉教授) コメント2(中国)高洪(中国社会科学院日本研究所 教授) コメント3(中国)林美茂(中国人民大学哲学院 助教授) 討論 閉会挨拶:佐藤元彦(三遠南信地域連携センター長)	北京郵電会議中心 (中国北京市)
	19日(火)	第3回GISデータベース構築研究委員会	〈プロジェクト委員〉 西尾美徳(カナエジオマチックス) 蔣、有圃、宮沢、湯川、龍、黍嶋、平川、曉	豊橋情報メディアセンター
	21日(木)	三遠南信サミットin東三河2006 住民セッション準備会議	黍嶋、岸本、平川	研究館第1,2,3会議室
	25日(月)	愛知大学・東三河地域研究センター・国土交通省豊橋河川事務所連携事業「とよがわ流域圖講座」記者発表会	武田学長、黒柳副学長、佐藤センター長、岸本	本館第4会議室
	26日(火)	第4回地域づくりガイドライン検討委員会	〈プロジェクト委員〉 吉井弘和(農山漁村文化協会東海近畿支部) 原田敏之(NPO法人穂の国森づくりの会) 三宅淳子(NPO法人三遠南信アミ) 佐藤センター長、岩崎、黍嶋、平川、曉	研究館第3会議室
	28日(木)	運営委員会(06-11)		センター事務室
	28日(木)	第1回県境を跨ぐエコ地域づくり戦略プラン研究会幹事会	黍嶋、山本(晃)	豊橋商工会議所
	30日(土)	2006年度第1回センター会議		研究館第1,2会議室
	30日(土)	県境を跨ぐエコ地域づくり戦略プラン研究会部会	岩崎、黍嶋、岸本、曉、武田圭太、櫻村愛子、別所興一	研究館第1,2,3会議室

## 地域づくりサポーター活動状況（2006.6～2006.9）

月　日	活　動　内　容
6月01日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
6月03日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
6月08日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
6月10日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
6月15日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
6月17日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
6月22日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
6月24日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
6月26日	地域づくりサポーター定期会議 岩崎、黍嶋、岸本、平川、曉、サポーター(天野、近藤、鈴木、保木、大石、大松、加藤、辻、三宅、片野、小川、沖野、大堀、村田、山本、山内、宮林、彦坂、柴田、伊藤)
6月29日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
7月01日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
7月03日	地域づくりサポーター臨時運営会議 岩崎、黍嶋、平川
7月06日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
7月08日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
7月10日	地域づくりサポーター定期会議 岩崎、黍嶋、岸本、平川、曉、サポーター(天野、近藤、鈴木、保木、大石、大松、加藤、辻、三宅、片野、小川、大堀、村田、山本、山内、宮林、彦坂、柴田、伊藤)
7月13日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
7月15日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
7月20日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
7月22日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
7月25日	「長野県壳木村 新米プロジェクト」草取り作業
7月26日	サポーター(近藤、王、大堀、大松、小川、片野、三宅、保木)
7月27日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
7月29日	だがしろう、ときわ通りアーケードで出張営業
7月30日	岸本、黍嶋、平川、サポーター(片野、辻、村田、小川、天野、三宅)
7月31日	「愛大生の店：だがしろう」中間報告会(研究館第1,2会議室)
8月03日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
8月10日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
8月24日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
8月31日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
9月07日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
9月08日	地域づくりサポーター定期会議 岩崎、黍嶋、岸本、平川、サポーター(天野、近藤、保木、大石、大松、加藤、辻、三宅、片野、小川、大堀、村田)
9月09日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
9月14日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
9月16日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
9月21日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
9月23日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
9月28日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日
9月30日	「愛大生の店：だがしろう」(駄菓子屋)営業日

### =編集後記=

三遠南信地域連携センターがある愛知大学豊橋校舎を歩くと、一年を通して四季の移り変わりをとてもよく感じることができます。9月の下旬頃からは金木犀の大木に黄色い花が咲き、校舎が良い香りに包まれるようになります。この金木犀、原産地は中国の桂林地方と言われ、古くから中国で愛されていました花のようです。同じ中国原産の銀杏にも多くの実があります。中国とゆかりの深い愛知大学の校舎を歩きながら季節の変化を感じるとともに、両国の交流の歴史に思いをはせてみます。また、紅葉を眺めながら、馬肥ゆる秋らしく口福にもあずかりたいと思います。(K)

### 編集・発行

愛知大学 三遠南信地域連携センター運営委員会

〒 441-8522 愛知県豊橋市町畠町 1-1

Tel : (0532) 47-4157 Fax : (0532) 47-4576

URL : <http://taweb.aichi-u.ac.jp/sen-center/>

Email : [sen-center@ml.aichi-u.ac.jp](mailto:sen-center@ml.aichi-u.ac.jp)